梅林亭藏書

特別
へ!2
5106

貴
ヘ12
5106

秋は夜長物語

これは去乃花はなざかりのころのゆうぐれ蒼白き
をすすめ。秋乃月はすいていよくぐらいぎけ詠ぜられ
さうとあらうに天いるるすあくてぶりどみかこをを
ものに人公ありてハ何はとあげらんやそ一人へあり
てぶんぞんのハくをみてぶいどどいとみうきぶんうの
幽がだいとある。天上乃あさいをやてぞやうどを
すむ時ぶちじにかいらい孫そんとあ家ぶうの
へよちよぶつがさつちゆ川ぎやくはげたうどたる。
ほうあうをびしやうちやうにつきえんぶきこいあく
のりぞんよわもむうちあ拾ぶをうていふこえ

いきやうぶんれきよせいきよてんよれきろやきこげ
くれいやにこどぐぐびぢうはみーよふきこれあま
つきよあくれみきりとかりしうばめんくみ枕きそ
ぐだぐ語へ老の秋ぎめに秋の夜れ色過ぎ一つ月ぢんん
摂播河の滝れ御宮に西山乃きんぎい上人とてだくが
くくんひーたりしんやいかくきいくくたりれきあ
とふくりんがくぬんれきいきろくりまりーげいりいきいよ
人みくぐおーりけうちみはぎくぜんのぶれを
くんてぼくよこぐんの月をを海ー。かはくくせ
きぐんちをふくて。みくきちいきいの風をかくげたら。
あり時いにんみくれ衣の袖よぜんーあ乃きひをつき。

ありの時いきいみくれけうぎのやきだけうへよぶんれ乃ゆえ
いをあるみ。後よちんぐくれいるんひぶん畑のうちぐんありげ
い神んれくれ花のちる書乃くんをんて。神あよれゆめやら
めくりくん。こいきもみよまぎぐぶれなまくくうくんの
きやくぐいきれて。ぎやくくれきりよ入みぐくあけ
くれいだぐくやくんつやくにのこして。ぎあつまきやうじ
乃ぼとあよおきくりぬくぬ。なきまーかりけくふくかこ思
いくくきよくれいやくて山くりやまのいくくををくづ。
山米のいやりれちぐーぐくれかくれぐををりきこだくーやと
おりしくくがきんぐよふくきくんのつぐ和い人ごとぬは
あれぐくきよくしれいぶいきーきんきくれきらきん

をすてゞ〻く。靈方どゝ申まつりて別れをゝとゞかふこ
つゝをかりそれいぶだりふあゝまして。ぐゝづゝま服
をとをくりそろそれ山乃うらよりごゝこゝとゞれかう
ふあゝりれけゝまや。てゝしくゞかゝふゝらんのそこ。
ゝつぎやくゝていあや。まりてゞ十年生ず。いづ猪
代日ゝゐんぐんゝいゝよくのまふこゆゝせんとゝて
いぜんゝ西ゝんゝんよ海ゝるゝんゝこれかどよゝひた
ちゐゝゝれゝふゝりゐねいゝゝさ海ゝやまぎたゝれ鯨をさ
まゝゝぐゝゝまやゝゝゝいぶゞゞ川乃ゝゝゝごをゝのみゝ。
山形をゞやゝゝゞ西せんとれゝりひてゞ山よまゝでつゝ。一
七日ゝ海いゞゞいゐたいをゝ比よゐゞて。一山よ海ゝゝとゝゞ

てゞたゝうゝんゝんこゝくゝせゝうゝせゝゝゞやゝゞゞいゝゝゞいゝ乃
ゐけゝ七日まんゞゞけゝ乗ゝらいゝんをまくゝ花ゝゝて。
すゝゝ海ゞ流ゝたゝ夢よゝ。ゝきゝ乃ゝちやゝれゝゝらよ
ゐゝよゝゝゝゝんゞゞ思いゐゝちごゝのゝいゝんゝゝゝくゝみゝたゝ
ゞゝゝゝ出ゝくゝゝちゝりまゞゞんゝ子ゐ乃ゐゝゐけよ海ゝゝゐ
思いゐゝをゞゞゞちよゐひゝものゝゝゝすいゝんれゝんゞゞへ
よゐ。ゝゝゝゝゞきゝて。ゝゝよゝゝくゝよゝゝゝゝゝたゝ
ゝゝゝ。神よゝくゝんゐゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
よゝれゆゝくゝゝゝよゝきゝゝてみえゞゞゝゝゝゝゝゝゝゝ
ハゝゐゐゐれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝゝれゝくゝゐゝえゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

たちくらりぬ。よそちりまうべきものとまつやうよ。今
やごうちんたちこゆとまちいくれいおを山あくいたのば
ばとおりひしーかいりをれてゆめよみえんちうちごれあを
うげ。時のかどをかをでいあれどアリーを後とのうつ
あらねばきんうこあれいひにくへひてきてをやうーあく
きひと。一川乃番をうきていたぜんよむりへでかんりアふ
ごんちんごんかうはのうりありよむせびてかをこがたま
ひー。姫ていりはのいひをかよきれぐ山れ花かころ
えて。うんていはよれい姫山のきんちょがをとあり姫と
ありひ。ゆあれ姫乃れをとげにうきをきくびあげき
ありひちんやうたいのれかくごをあそなくひ山まり

きんくかれ一人乃あをうしあかこんのはうぎ
をちうさまはのむはこあくびとうありひうり
かど。我おがアさんをいうさ後きんをくれれかり
ぬてて。だうちんをを後こげさたまふまや。たちひさ樹
乃あをアはありをを。命いきてうかりとれいふ
うかむりあ面をを。ちまうごんぎれうきまつかて武蔵
乃方をを。ちくいまりくれをひまむをうごの山のくん
をんををうかうちゃーさあと心ひてみ川山へくを後
でうれ三井ちう乃まへをすぎうかあうとをきあ
まを面乃かりはうくとうとうればをーくあら
ちうりれまを後きんと心ひてをんだくれくへ姫

よもやうごぬんの山なを乃をよ。をまれふのいろことあるこゝぢふがきかゆのうてみえ。ちらかゝよんあをみれがむあれがまふかうちへいふものふひきへられて門れこゝふかたちるとられば。よもいニハりりぬちごこのずいぎよんようすられふ井れはこめかきゆておゝれ四りりけやうよけまりゝ。ふくたもやゝあるうお。人ありとをふゝぎるるやゝすれゝらうり庭ゆ立出ふく。ゆきこゝもげよちきたゝ下枝のれを乗よて

ゆるゆのよぬるとをたゝん山さゝ

くをれへゝの風をゝふけ

とうちあゞめて花れちゞくよ立ぬ生ゝるていゝれを

ゝあやまをれて。さゝふかぎをやあんこゝぢふゝれ

ばゝりふゞりの種をゞかゝと。雲ふをを震ふをもゝすべき

こゝちすゞをゝるよふふあき風れ門のとびゝをきゝく

とふきあゝゝたゝふ。あくふ人ありやゝあやゝしゝて。

えやりて花をあよをちあゞゝかゝつれりをめゞり

てゝちゝかよあゆこゝゝるゝこ。ふゝるふをれゞくゆてゆゝく

こかゝつをゝるかゝれをゞ。柳のいとふうちまゞゝれて。降

ゝをめゝゝを。洞れくゝとえゝうたゝ日つきゝれ旬

ゝゝゝを沢樽。り湯ふくゝをれを海よりゝつゝいめの

ゝぶゝちよ。すゝゝをたかゝねゝ今のゝゝよみゝ知れ

ゆあいゝちわをれて。四ゝれゝれども紛べきゝを。

おげえどそのよいこんぎうれそんよえれみて。
をけぐらあうえんまびぬ

これやゆあうとしやうまきうゑて

いはまよはるよ

歌あくれば又きのふの月ぬ
ぐこころよりはいのいとときよげあるぶぬきれのきさ
ろうづまそんとて。門のかまて出こう。是やきのふれ
ちごろまこうなるうんとこひてこちよりつ。ちと物
ヤうんとゝへであるぐとゆやいやうんとてこのやう
あるうきをあ。ぷとりしうこひてきのふ
はぬんよすいきよちやのずいうんめうれて。ぱとれ

りど十六七ばりにみえてきせたまふれさあひ人のれるす
やちりまふうきせ給ふとよへば。童うちうんて。我こそ
そのうれうこまめ。つふるものまてへばおとゝ梅ふる
きこえとやはぱ。御さとは義そのの大臣とのまてはふりは。
はれまくかうこまくいりりのあるとだまれがし
ゑんされねほどのぱんあてまてはへば。ぢれらうこう。三
やくちはまをとれうる。一ぢの花をみていよそよら
ふんをまくなり。秋の月れくまるれまはみか我家の
ひうりをあうこまはぜいまてはを。ぱ出所のれあうこ海
あまうまゆうれうこうぱ庭ちかうよぐうんこんれう
のせーうまうでいぱ。ぱそをはいうとぐうこうとうまう

きものぬいでいたをかくり。ものとりて。ものとり
衣をかつきせ給ひぬぞやとぞ語りける。男は何てもい
とぐんをうれぬまじやうぞ山童をたのうまて。ぱぐれ
ぬふこはくまてもぬれはくをきせぐやとぐんへ
あらはよひこはけこんをきすうまれば石山へ参り
つ。又ぐ山へぞうろうろ。又ふしい髪うろうろあれか
をうげよあきをせぬねをせぐあげきくく。おりし
あくろがもくこんのれぐうれ金ぐんよむしたり
たりし人のあるをぐねいぐぐて。ある時い引いかれ給
よことをせ。又ある時いも西えんよくくしたりていり
て。一夜二夜をあけるうちひくくにありよろう。其姫

きれのもくいをくくひよせて。菓をのく酒をたくへて
あそびろつ。つぐくよこぐのれくくぐのたくくれよ。
くきものをいきて。梅りぬきくくあやぬきんきう。紀
久れ小袖十領よくくりうくくくやんぐれふ
くき紀をみて。ろうぐれをぐてぬけまありろう。楓
梅ろ恵よこひまくへ子ふのやこぐつくべくとも
おぐくぬりをかくくれぐ内ふくをあそぐて張
くりふへ色くて下ふんもんとぐやけぐ。ぐくふれを見
をかぐのくろ紀をぐふくろくくくくくあり
かくくれぐうくぐくくて
くくせぐやかろみくくれけくうけよ

たちそめくものまうへのあるを
とかさてをくつまるるぞ。ふみをみてこころうれ
かして。見はらんにへいつそや面はえまの花のけす
こちぬれてぬるこころはひろをあるいかのうふんま
いらせて。人をれぞこひうめうる紙の気もそや紅よ除
ありてをくじりにはくかなしていやうよみえい花
やとうれば。梅見うえ。ぎきうかうちなうあてみのひか
をとうんとしはひろ。ぎうをよもあひせなるうふう
乃をうはたる。ふんいふ人乃。すをかつげてうちへ入
ふんをしとて。神の肉よをかくさば童ぐんぎあせ
ひまをまちて日ふくまでおこうをうるよちはのん

乃海どよりは迎ぎうきてたひうぞ。ふをかろ
くうれしくて。いそぎをもちてひたるよ。ぞ川先を
あやようつこびて海をうよ。ぞをあくまねを海のていま
つぞひきてうればあとぶそまくて

うのまはよ人ぬちてろ乃をれれいろ

あくまるくものかるふまはいい

ぞ川ぞ山をんどをうて。ぞいをうれしうふをたふた
ちくふ。ぞべきんをきすあひうんねをれ乃ふれうふをぜ
ひうをまくはぞえうぶぞんぶぞうなうれやどうまをも
をぐうちぞよをあくうをうれ本来ををみつぞくさ
ぞやとはあをくをとぞぬまうふれをはくけうれど。

ゑこを釣りはじめ。うれしくをかしうもあり。
たまひぬるものゝかぎりぞ。ゆくへもしらずはつ
やまへこうりけるぞ。一あしゆめこそはいみじう。こゝあ
はゆめこそはたちとぐまりもゝくるはるよ。春の日ぐ
といへどもをはちくれ頃かのちとぐらまでゆきつゝ
て日くれぬれば。とまりぬべかりけるぞふしぬ。こゝや
うとぐまりけるぞ。春もひくるゝあるひてあるゝふ
まれば山へのぞらんとて。おとまで出られぬぢひきの
なかをこうまつきたるがごとくぞ。ふれあるゝねんよう
とぐめられぬれば。ひきくゝして大浦ぬとへぞあこ
れけり。夜もあけふゝるれば。みのうきられて旅

人のすぐさよ方をやうつゝ。ゆくところよりかくうさ
けくうむまれぬれば。ゆきあひくり。猛あう
らんとゝんやりたりくれば。柳ゆくたらせし
童ゝてぐありくゝ。ゆくりをみくなかみきゝゃ
べきゝありて。きくぬ山までもくゝあくんとゝつる
よくれしくゝ釣りあひくゝをみるゝあて。むまくり見
ありて。ゆくりをくりて。ゆくりくあくれぐだう
へくたちくりける。柳ゆくゝふとくへぐくふゝとくゝ
くりをふくゝれくる。ゆくみぐがくゝれくゝすゝゝふてきへ
くゆるぐくりあくる文をくりいぐて。ゆくあくゝ山よみち
海くゝのくをゆくきくゝしぐくりをくゝべくて。ゆくゝてまれ

とおれせまるひつるうしかくどのはかはなうひぞやさは
て一重の塀の内神社へんぺさくいつ丹のたくぶれとうち
ちうへんぺ丹りをせあてうれをあげくかとあぐぐ
とたくうれかのりてあをとんきい
いつりれあるとちてうさうう
りうこうさへうしめれうや
海西れうるうよりうふ西との坊のへいうれかち
ぐくれ屋くて海すぐれのひまをきれよりけられい
へりとうくいちきりにいきあへんぺうりうよんひりれ
て丹りく文三年ちるよゆきぬ。章をきぐしれかどやと
りて。あるぐくれぐくうんぐよりをきうれぐのりぐう

ぐをきれいとうこれかりうを面めてうくれいとうこれかどありて。鄰
まはちぐどをきをあまうこいぐてうん絵をかうへん
れ家あうせまぐして。日をうをりうるつ丹りいちよぐうん
のうありて。きんら大明神より七日きんうれうるうよりを
ひて。ようかれぬんをれうこうよ立きれて。ぐき
やまれ松の赤絵。ぜんぐいれ鄰の座よかうれてかうるり。
ちぐうをやんへうをきて。へめをうかと詠うる
やうれどを。叶ぐ出るひたうれぐくうをうを中く
くうくれいりやうぐくうをうみうぐうと我分
よあうを奏めて。人れ情をうを命よせあとうへんぺ見うやく
りていうう。ゆりていりりうかく日数十日ばかりうりを

あらけなうぶつぶつとくちをあけてものもいはぬ
なれば、はるばるとやまへゆくうまんとおもひてうま
てこそひとりのれば、ゆくへもしらぬ。
はるばるえんぬまといふてうまんあるといふはへいげ
ふるまてかへられてあるこせるれよ。是へものいやうかはへ
はへしと仰せられいつてうぶつまでは結はへしと。常げ
ん云捨てゆうてうぶつ是を聞て。ぶつれ乱ていづく
よあるゆ我方はなしはなしはけゆうはれはくと。用はあ
みめぐるをぶつぶつはなしはなしはよ。ぶつぶつきのとをんのあるお
とはるよ。書淫の枝葉よりうよ。遠はえいくはるよ。ぶいの
童を紙よ立てきよなみれちやうちんよ。是をとて入てまり

うぶつ。そこ出りはくあるよぶちごきんあれをいうんあるや
ふるちをはれるていまて。みるへやとかぶ是ものと
よ面はらひるまは。紙くかるあ事御ぶいぶいふりう
あ紙さ面よみえるよぶるしいやうんはたくしくて。
あるかとそ是童ちやうちんと。ささそれ軒よ為く。
書淫れをかとくとたるきて。是はれるうはやん
とあんあいはれ。律師いはべきかをもくでちとかる
いるあんをそびもるきしてあるうしそそくせる。
そくはは文庭ふたちゆうぶつ。ちやはいうはへとやせばちごいん
ぶつてぶまどをあるはそのの神はうりかぶぶかよふる
ふるうるうるそひくぶつたはへぜんぐんる

秋のせこれをうとこそいへ。そんでんうかいのまゐにた。
白菊花をもて稲こまれ月のもとねまれぬべき。もろこれうか
ぐせ。ちくれしいろよかくとあるも筆もそまびうくく。かつさ
ゑよ云ゑ。あるべし。流とたよ枕とかり。まのあれ
流をうへどなをちぎるべきむつこともまこはなまく
こ国さむしくらんふこれ夏きあ。まんあ武蔵まれて
うぐめがこそれば。このをとばけれ一ゑよあげぬとはくゑ
とりれ稲もうめくすれがきぬくひやかよありて。豆
ゑまどはるよあげこれ月乃面どれすりうまなくを
さしへうれば稲飢がこれうくくとかりたるまづれうち。面
ゆれるわいわけやうよ。海れくなるかれあもげを。

見ゆるはゝあてほはるもげよ。又あよをまろ社れ命を
べれ愛はつ。ちゝいらごをまくく曉ぐたりうまに
て赤ちへをへをせば。ちんれれいきのうへよ立り。
ちぬうろ和よりちへきうりて。海めことてさ
うりあげてみ逢にさしもたかうす
ちう社よやくやはてんきぬくれ
ありこうりりけしありあげの月
ちうしちよゆんりうへ立て逢歌
そをみし月をろ稲乃社れつ逢
ちくくいくあはけれなりうん
ちうくいあはゆ夢現をたるもをひをうぎりうあもりげを

かよあれとつる神はよろつ香どもうちかくしみて出へうられたかをれ魂くられて万代人の地をもを見んじをせば。おのゝえぬ涙人めよあまりて。おちうべきそぐをちらしてぬべくれば。いとうるはしとひろうして。人よ對面をせす。ふり流てそ日ををけう。童はのをを待きて。梅ゑぎてよかくと俊ゆくれば。ゑ俊よまくかくるきうにひとげかれて。ぬきき常よあををくちをれるひねぬ今をやをとはきあるとをばは如よこめてまちはひくるおのまりに目敷ありくれば童をのびよせて。梅をあるもふ。おれ夢のをちもはくゑれよれとうびゆ俊をもはくて祖へぬれはたかくれよ

はよあくでハをのましよやゞてをばうへき風れをくちこやらんやえをうべ家れ令をいくぐりぬらんをーいくなりれハあくらん沼をとひてをかひるいくるん山れ奥ありれ弱ゆゞやとえれをくるゑて海のアあハらんをれはんをさをとれをいれをそれをれ海のびれ形ををぬあくれをくひすくくーとのをを海ことくかをてれをれよんをつぎーもたりせーをぐぐやいをれ程よをれををへーているる虎ん蛇ん、ありれ弱ーはとかをちを強へハさくるよまぐいをけあきあくーはをてゆくんよはひつきあるハわとるあくわぐもをれあるひあれハ実形やと童をひをりてをくんのをれ

をゝ。桑原くゝ。いへハ。はるゝ。もゝ。山ん。ぱ。和のぎよ。いあ。くゝ。ゝ。はる。
ゝ。ゝ。ゝ。

らぬくすもをれくれは爲あり。そしの糸ゝづちへとも
きりたるへさそこにのりけるゝ所なよ。京坂ゝとり。大坂へ
とそる橋へ乃ありけるが。傳あひてさやくれはきあひ
へとこに一人めゝぐてきのれ乃いあのこくゝり
よかゝきれけるこへこれとこれこゝろいたゝとぞかゝりける。
きていはは百きんくきのびて。ひかよをとかれあり
ときてこんしゝかゝりきあるとそのんけのうち
いかゝをのゝびゝ一ゝ乃きあとうこれのあのあゝゝ
山りんへよせたきるるハかるよへゝゝちれはゝも
きりたりゝあるいよもあゝゝ。まゝ花そのくちゝの
ていへとゝよせてゝみりせとそゝりんとの大

きあ百よ人へはくゝゝにはのていとてゝきやゝ
ゝへとゝよせて。一ゝものこゝずをきくゝふゝん
ゝゝれきあとこれてるをいきとりをきんぎん。
一山一同せんぎきけ系はきゝんのちゝよくをよくべ
ゝゝびきよせんはいぐゝをゝけく。尚ちにやくゝはく
とゝあへゝるやゝはいんをゝていんゝんの大きあさぶ
めゝゝよせんずゝんこれ別地乃剣よつきく。
かゝれをはゝゝびゝりゝるゝ又はゝやきゝとりそ
けてゝはゝりをえゝるゝゝんちゝゝべ。天寛よゝきゝ
とあゝへゝゝきゝくもとぐゝ所へゝゝび。一又同仏
のきあと。こゝよんはよいこえを不こゝりゝ知り。

ゆかりとぎをひきよせてかきあげくゆひぬいて
こまやういたんをぞたくられる。ぶんまいそこときて
あるいかりきせざるべきぞいざんせしとおもんぎやじへ
ろうよするるぶいぎんをぞしよ六ケ敷ありぐらけよそ金
ぶけよみれぐらけ浦まてをあくへくひばとうけ
きびをーよせてやきろくへとておるまけちやこみん
七百三ノ所へぶれをくゑちんきんごけせいぐをあつまり
てぐそせいぶぐーせ万七よ余人とそろーけるぐ十月
十宮る中ぐそろのはよあくれはこれよすぎこうよ
きはあくへくびとてぬんくばーくのせいをぐせあて
よぶけてまぐ卯の刻よをよるあひはまんく

くるちがかくまれ乃くぐ浦ちよ海よむちうこあるこもも
ありあくひいぐうくばるちんはこまいのはきあれか。
あよきをばとたいちあるもあり。おそいくいよせろ。その
中ぬけいくいアけーはのらんしやくちーあくく。部
がくうをたこれぐりひあれはんよりこれよ一合
せんーてかぐ〇をせんちやくにくめんとぐひひぐう
くるどーぐあくわばくめ百よ人まこちのくめを
あけねまよばういが前よりそよせこうろ。ばれ
りぐくよあくれば十宮ぐそろ乃刻よ大あかくめて
城中ぐくーぐて世万七千よ人周るよ小時をあげ
てをあよくけぶたいきんもらぐれこいをかくぐれ

てたつまちよこんあんざいまてたつかてくこかて
ふこもとをもてうこず。せめいりよけるよせてよ
はこあせん前日くろ
あんあん流さきんせてきやうめくん流すぎりと
ありくさいきん命さいたくまいちやくきせうちつぎん
んやくだ。あんこいきいやくきくこういきやくちう
きやくあん命。ようはまんぎんかくせんちくやんこた
う。かくきくきくきをあり。こをせぐ。大あるきんまん
流のあくづ。かくく流のてんぐ。みんきりけあくさぬ
き。かふくもれ魚たまえ八分やぶりけむう命。三町てよて
のきやくー命。けきりこれこのそよちあう命。おより命

を惜まず入入、あひたくかよせてハ分あれど。
くくくをもてうこず。ふせぎていあんあいきやあう
なれハ。変かこのつまりぐおよせありせどひえくあ
いくかふこときだくうれ合戦よりせてこ千余人
ををひて敷ーくん生まりくれハ戦けちいよくかう
よあて。ぼき紀をまりくくちいかくていはきやくきん。
こらいざいをあるとも。だとくつべーせみえざうあいぶ。
けいういたきよいくりてやくろハきんあんりはくへ。
変てせめーすすでよ六交くなり。毎度のたくかひ
くれよをくくくびといへども。兵海どよせあう。きくち
こよいまざあ。いく程もあきりう一切死人よてう

めたらんにまどうぜ減せめやぶ〳〵きんぴく〳〵ぐんし。
やぐんかりはそこせいなる中へぐんとびあり。二町
あまりよみえうきりきれ上へそれきんを蹴
でぐるあぐりぬりまゝうう魚いりうよまてうち
ひゆゝうまと以ごこえてかぐきき三百よへぐ中へ乱れ
入てひくれをらゝしてぞきろうけうきげ切げさ
ひ車切きむなてうてふ一うきおきうてすゝ中
逃ひぎうきたきうれくらひぎういそうう波
乃歯くうぎうらんうんひゝうぐもてかくまいを亀
八分をきうて歯うけうよいふまいこえを姫きける。
つくうの二百よ人あゝをもうあび逃えられおりい

たうひよおうてひげいりひゝぐぐゝぐまうたくみ百よ
人くうまうりてみんくふかくよたをかくる風たうま
ちよふいくを分よおかひくれいうん堂かくぐうしも
ろくたくきあくゝちゝぎやくけうくまいのはくくう堂。
ふぐん尝きあくゝくんによかくゝだくけいぐいくはあくゝ
乃はかんぐくちせくゝ大師はれあいだくこうんさきの
波ぐくゝにいくふまてそふしてこふん三百よ一時よくふう
とありえてくきんら大明神のあやだんより初八ぶの茶
西一川をあうりけりきう風ぐよわくくくこ三年茶
乃うやくにあうぬくをきうう強ぐぶ石のろくはおうふ
をくこあられてあげくれまけきぐくえかくける

ぞよ。さんくどもあつまりてらも山は掛(かけ)して。
らひろがるがまれくがおくそーろきとゝよすはぜーま
ふつゞ風。こゝきうひろん乃をまよきくいかこみのそく
いんぞ。さんえんあんとのみこーふりぞ。山(えん)の僧乃りんだ
うたくこれくよくいくうんあつをぞきて
一あせいありとゝひつるよきのみこ弁(べん)るれろにんいきと
いのそくまうあてやせいそぞあるてんぐかーこくくり山
むめあきくをうりくけるやきくすいこれかれ
いくさはいぐきーしやくごのんのうんさ面たちかる
たこあるさへまけさせ弥よむたーはよぞれくけうが
系うくをるくてけふとゝんぞそぞあるてんぐ

ほとゝすくうぐとくんへを
くりけるまぐみるてくれありさ海や
ういつくりてい弥をのをあく
とゝみていつくかくれば。産(さん)れてんぐどもぞえ川
ぐよ入くぐまくひけるわうぎくいくれどきく結ひて。
はれあさ海やそくんあるてくまれゆんよりびにくう
まやとありひ弥へども。くりくくよべきんをあだく
まくふくくもよくらまびてぞくまりかりれすをふ
ーまくぎくかくだくう
じやくまくのこけれまくる神あれて
あくくこの面(おも)かくく海ぞまれ

かりけるそうろうよ。あるそうろうの國にせんをうとて八十
だいうあるらんおくれにえんをうとをうくやせうう
けるをたくそうよいまあてこれを石のうくれ間へへ
そう。一夜日ありてこのおきふらごとまくはのあれるな
しをそんてそうそのは神やぬれてはとへばちごを
童をとをふすみあれ一重かりをあるくをあそび
いしにうくをそうこあられてはへばくそう。所しやう乃
あびきおそひやくあくうびことをふくぐおちはと紀
るあけまびさそうは神をぬれはらあとでうそう
けるらおくおやきよるろしびてさいくまれはれ
うを殺へだ風はくふうそうとへ法をまくうせんとて

蒔山ちごのそうをおりそうよまくたるうはそうと人
乃をふだうひるぐれつゆまくぐつそう。おくふこの
鶴をひぐうにあるよ入てくをまりをぐんすうぐくう
するよ。ゆれもかぐくぐ。まりれ大きふありぬ。
これをまくこれよりけてはくれたふくうよ入
てふぐくゆるかぬるはこれのはあまぐはは
大きよありてはくれうれうみふくくたる。大水
よありよくうはくよきよくふ大ぎやよあ
てらいてん乃てみ地をうごうはいまびくれまくう。天は
ひくめくさくきせいの天ぐせ。ちくるくきてはあ
よはげうせくれバはくヨくんのくをけやぐうてちごと

童との分あるにあらゆる所ぐるくあん安堂
のぜてだいはきくせきもんぜんえんれかくまてだ
ちくたちうちだくそく野女みあをより別てものが
まはまふくりぬ[illegible]きとわくはは我ゐ里を見て。
これそのへゆきたまひこれかくをあくべてつくち
くりしくくてんちくかくみあやけのくりくあり。
すとよべきんをあ。あくうあうそくぐくまてす
のやうをぐるとへぶざいぎんとのいきんぐらわ志
をひえれ山へくぐりれきせたまひを。海里よまろ
めくれぬすはあくどとて。こ井でくよりをくしを世
てやきくくひていありとぞかくりけ。おとぐれ出切

志。とそんかぐたちちへきやどをおそればさくばこ井
ちるよゆきてどんきあ出ずるをぐるやきんとてぐ
どくくまくはよあをひれて。ぐねてくよりて足路ば
ぶけかくそくぐ一けものくびやきくくそれてが
むていれくきのつゆよあきくくえんの松風れ山ぐ。
これそのすみくむくれあくよとてみれば山ぐへ
のゐをやけくぐくて。けれ足どりをくれあ井す
んど。のきぐれむめをえぐくれて。秋まつく記
ぜをあ一柏ごくよかくりくてあるくのあくね峰
れゆへあくしわきくひあれば。ちんはくよあもたぐひ
人くらめもさくそかくあのくらあとぜなきまくれぐく

てゐるようめをあてられねばこうををしてそのゝちハ
さんら大明神乃はくらいでんようこすい乃月をあがめて
あれあるーてきやくこのみんハそうこの山ようやれ座あるう
らんとうぞひりられとも。これようをれ座ありとゆせ
八童さいりてうこうひハさんさいの人のていまてかんだ
うようれ座いへそれがいい山へ歯ようれがりくて正月し
乃はぞうをうぞひりやくんとやうれハわうきこと今ハ
たぐうき世よあうどとも。ぶくありひさぐあたまふれ
はうてうあうて。うやかくうりとぐひうんをうくふ
ふのまくようりあうあちまも分をうぞめんとうりり
くあがりめり語ひて。うぐくふこうとうきたまふ。童

はふこれて山へうるひのがりうれハうりし童とうち
乃うようをうきうにをのをいひえびさあくうそぶ
きけうるうハをるうぐををーのぐびてはありてこを
つうるどもぐうらんとすれハまづ内又をえはうん
とてをーひうきうろうよ。あやしきうあり
もうかうてうろうきせの
うこまてううせやまのえ北月
正月ーいうをうーうひて。これはうんはへはうう武山
ををるくはへハうふうをみうはぐはは地流はへまが
いをぎをあうはんとて。ををををうう武ようて。
うる物をうりあへぐ。うぐ二人ひうをあげてゐせゆ記

ろう大はをすぎてゆくぞよ。孫人あまたひあひてあかいとりやけちごろあり根ありてゐ男をなげたまふらんゑ母ちやういつよりげきたりんず
らんといひてとろあやちやとこひて。妻こひられぬ
ゑびえちぶまりて。たぐいく勢田の橋をまちつ
いつるところよりとり十六七ようみえさせ給ひいつ
れちごろ。こゝぞの乃ゐ神よすいんの一ぐちう
めされていひしがゆよむこひて念仏十ぐるをこ
あへてれ為をあけさせたまひかゞよあまりれ
いるりきるまれるやどて水よりそのてんの
ゐられそこまでさげりあやいつれ世。みえさせ

たまひけるねかゝよ。ちうちうぬうすきいありと
かうて。おうこをくくとぞこゞ。ゐ猿人のうゐ家
を文てうれかでいちゐれやう。うゐ猿人のゐ家を
ゐ川もうゐいもいあきれ。ゐれ。てもあへてやうてゆ
ねべきちうゐ迷ひ。むまをちやめてりのつめよ
ひてみうよ。ゐうもれみをちふきでひたまひ。
きんらんゐかそおのまゐりよ。ちいちやうれ者びれ
そへて。榛柱ようけられうゐれでみて。ゐいしこも
童をおあゐあゐれよをちづめんとてうへこゐれう
けうを。ゐうゐぎゐくゐうこうあまうこゐりてゐめうれば
ようやゐのむゐきちゐひゐあゐれ一めゐてはようゐ。

かくをあらめとれをひて二人はをよつふぎひて
ろ小永よのうてかれ紙をちれそこをのぞき求れた
さらふあ。わたらもがうしたいみふくぐこのみ
ありて岩ばをざ海きしたげまでのこるあすくはぐ
られども。かくてろるかよはうりてぐこのせと
いのこころまて。めくぐうらればせられてと海ふ
をみぐをれふ井かきいろしみそいたれば
よあぐれてはたるきしきれあるをるさしうせて
尺ふればあるもむあきくかまて。けなるかとふが
ふくをよみぐれかはてぐそこれあるこゆられいと
はをくくらりあげて。かをひぐまかきのせられぬ

きて。きこきくられふ井ろ。ちかくとちるふ岩れと
くあろ。むのれあるうもをひえそぬ紙て海ゆず
みれ。ろうがれてかはてみどりれうとうきかが
はろくねども。一うびをあぐをろうこびあるうまふ
ちうをかさぐりて。ふてんぐれいみうにめをあてられ
ば海ろよ玄系ふうべしはをいかをひさるかき
のきて。天よあよぶてふ紙ふむむうはをかとこ
ろよいれて。はれをびあるすてをうせたまひけうぞ
と地よみ。逃れ世ら。けくふ枝をちて二てび長さく
ふらひるく。弱月みよ傾てゑあるぞうにくふるる
くればきけぶ玄さへられつよて。ら れ洞神ひ水ぞ

流れ、ぐるぐる。二人の兄いもうと乃及び、ぐるぐるまくるまくるまでもあるられけるけよ伏まろびて。ふるをかまはるるきかのしむかくて椒しもあるべきるあるねばこの粗やぐて近山のちりべ壁まで。むるきくみるとなしまてのちぐるぐるあるいるるるいはるるつきて海

迷どもぐるりしし童といかへらはるて。むるき煙り匂て。三日まてるれぬるるりけるが国るけるも煙もれだやといふへれ。いまんのきるまるまてるまる活ひしれ方よ。そこまて照せ山乃ん月とあしいあるるんあるを吊とのるまてるるあれとふひるれいぐるるり山へも飲るべ鈴ゆいるるをるひまるけて。えんとるるし

げるが母は西山いそくるまるよ。りんぐるるを結てぞはるめ
ひるる童かるをおるるとるる聖山ゆぞるるこるるりける。
るのるるんるるやるるしけるこまはやるいぐるるるるやるれ
るるるとこ十よ人いまは兄海るて位るすへきやるるるるっ
ぐるれいるの舟をあぢきるるくえて。みるぐるるんせんと
ふひけるるぐるでるるんの燒位よ兄海るいせるるんくく
のるるせるるるるりるるんるるるの勝をるやるさるる
とふひて。みるくるるんら大ゆる祇乃は前よるつやるて。るを
祇のるるるるを接るる。粗るるるるるるるるて。長沢
乃るるるひるるるねよ。れれるるるるるるるるるるるるる
加車をるるるるるるるて。びるるるるるるるるるるるるる

かくれぬ。ゆゑ。なにいきやひあり。あやしく。なれあらうんとめ
とうれど。ものをみれば。或ハ。ゆうむれ。大そく。ものやうにやみ
えうろ。かうそく。ものあり。ものよのうて。ものの大きやう
ぜんぜよいよりし。或ハ。ゆうんたじしきそく。たいれ。かく
ろうろをたいきうずいひやうをめぐ。或ハ。ようようよ
くせんそんうふんたいそんのたまをかぎりたうよの
ものてやうものをうきぎんきんれうりさゆうよおいきへ
ものぎ。ようちぐりたうちやうよ。ものいうあうんあてれ
ものうりぞとそへハ。ものまぐきうせ。ものひいとや。ものそ
ものきうやりよれ。ものひ。ものよんものうれものうれ
へとぞそうへけう。ものちやうかくみかうう。車ものりれ

ありて。ものれうへへ。ものへハ。ものんら。ものん。ものれ。ものう
をたくしいきをういたくうひきんてんれ。ものうよ
りいて。ものよ。ものそうんものくれ。ものいあり。ものきうくれ。ものん
あり。ものんら。ものん。ものれ。ものうをうぐけて。ものよれ。ものた
のしう。ものへ。ものれ。ものくきうて。ものよすでよ。ものけんとすれば。
ものんものくうんぎよものうく。ものやぎん。ものもんれそと。ものて
ものう。ものて。ものて。ものせ。ものひ。ものぬ。ものんら。ものん。ものれたまれそを
ものれ。ものて。ものて。ものせ。ものひ。ものうう。ものつやれ。ものん。ものう一
ものれ。ものれ。ものよ。ものざ。ものまづきて。ものう。ものをまりてゃけう
ものまやくひだんれすハぬ。ものうれ。ものくきいよまうせ。
ものるのうんものれとをぞんして。ものきやう。ものけし

ゐ出てゐへハ。ゆをもゐとのひがすとんそんどゐゐを。
ちうをさんとんみぞうよ。うびくゝもちくゝふをそむき。
ゐゐぐゝまゐやうをあつて。出るとやき掛つれば。ゐん
めい仏だをゐつゝ。ゐんをまやまそれゐらんとゝそむ
ていよ。南ちてきうゐのゐんん門。ちゝごのうこ日よう
山王よたいして。後よゐ仏ちうげよゐみをふくみ。ゐの
ゐをあゐ世話ひゐハ。ゐうあうゐんアよゐていゐゐん弁
ぐくうて。ゐゐへとやけ迷ハ。明神つゝやけ大ちうを
ゐれおよめされて。ゐゐとの根ト。乗ちゐそれあゐよに。
アとゐへた。ゐハ皆一ゐゐれちうん。ゐんゐあう。それ神ゐ仏だ
のアゐ王ちう後をたゝ日。ゐれをめて。後をあうゐ後よ

をゐ。ちんどうのゐいよはあうゐ。ゐをひてどうをゐこ
なふをどひれれをうし後ゐ。ぐちあつぎやくれ二
ちうをとのちく。後よむどあうゐ善提よいしめんで為
なれハ。ゐようこぶゐ人いまゐちうべうゐ仏岡そう
どうれやけたうハ。ぎうゐのいちうよゐいせのうやく
あうべゝ。きやうゐうんちやうけうれ仏ちうゐうハをゐ
ちうよちやれてちえんうう。ハいのかゝぶつあうよぶやゝめつ
のちゝあうゝちんや。嶮ゐをみちうようてけいゐが
かりちんして。ちくどくれをたうをいてちんずう事れ姫
ちうよ。ちんじをゐれあうをやゐちんまゐををんじ弦
ゐあらいアんあり。我ゐうんうよたへをゝてゝくんぎの

ゐをかつらせ山の観音のとうあんこん化のくど。
海よりうきき大きひをやとおかせられて。月
神ちやうれうちへいつせ殺よとおかゆれいつくやえ流
三十よ人一どよ髪さめてぱ。おかさ面よかうろう。梅八
ちうざこの分おけ殺ひしもぱくんをんのちよこん
ありぱちんれやけうをもさいどのこうべんありや。
ちんぐきをもよめいぐされぱ三十よんれちゐとみおか
りちんしてとをふ伝をちゐきやうせんとてのの
けいういせんさいよんとあををうへてすみ殺ふいえくく
ひゆんぎつへろひひてみきぱ三ちんりくをやれおり
ををくをよりけてまつの影ぐと節ちうて。殺菓

と命ようて徒れ年を送殺ふ海よれ髪さあくとうて
うくすん

むつみ月のひうりをちうへうて
こちひやきこがりにけうん

こちよゆんりうべようれつきをよけうをぱんとかぎうりゆく
ちいうんありて。新古今のちゐけうれ郷ゆぞへさせ
殺ひけうぱくうふらびとやあうすまれぱいをふこす
ぱとをも打形ぐちゆまりうぱ。東西よう
まりあつまりて。都ちうきゐあよちをとてくぱへをもつを
やくせんとて東山ようんこうぐといふれぱうをぱちん立
して。りんそんよこそるうふのきをおこすふたよ

乃養蠶(うが)やうよりてのべてぷちやう人をむう人のふ
ありさ海ぷろう人をんぐとなたこさびとてふすす。
行んごんらひすをつきてぷくまらいけいす。あん
ひよたふをてろをあくせこれをきやうらいす。佛(ぶつ)
乃ろろ〇ハちんりれてろるすれハ海ことよたくらく
とろろれいきくゑとみふおうろをれとさずしてふす
ゑ。ぷ(ふん)ろれ紙(ゆき)末たつときをいやりきをぷ(ぶつ)法(ほう)をゑ
ひ弦(げん)ろすがんらうとしうや待(まつ)へろれ

秋乃夢長抽筆

寛永十九年五月日　安田十兵衛

正安城　恒義長　藏之